

プエルト・リコ，問い直される「正史」

——ロサリオ・フェレとマヌエル・ラモス・オテロの作品から¹⁾——

久野量一

はじめに

本稿では二篇のプエルト・リコ小説を考察したい。

一篇はロサリオ・フェレ（1938～）の「呪われた愛（Maldito amor）」で、1986年にスペイン語で発表された中・短篇集『呪われた愛（Maldito amor y otros cuentos）』に収められている²⁾。もう一篇はマヌエル・ラモス・オテロ（1948～1990）の「濡れ手で粟（Vivir del cuento）」という短篇で、こちらは短篇集『真っ白でスタッカートのパージ（Página en blanco y staccato）』に収められている³⁾。短篇集自体は1987年に出たものなので、双方、同じような時期に書かれたと見ていい。

この二篇をあわせて考察しようと考えたのは、両作品ともに、劇中劇として書簡や小説が内部に埋め込まれ、一種のメタフィクションになっているからだ。ここではメタフィクションを、「物語」の中にもう一つの「物語」があるような、構造上の手法という意味で用いるが、もちろん、このような手法は古今東西を見渡して目新しいものではない⁴⁾。

本稿で確認してみたいのは、以下の仮説である。すなわち、二人の作者はそれぞれ、20世紀のプエルト・リコを題材に小説を書こうとした結果、中心となる物語を「物語内物語」として設定することしかできず、それを批評的に問い直す外部の視点の導入が必要とされたのではないか、ということだ。

このような仮説を立てようとしたのは、二人の作家が執筆した背景に、プエルト・リコの政治社会状況があるからだ。プエルト・リコは1898年の米西戦争をきっかけに米国の支配下に入ったまま20世紀をまるごと送った。留意しなければならないのは、プエルト・リコが19世紀までと20世紀のあいだで、同じような性質の「植民地支配」に置かれ続けていたわけではないことである。スペインから米国という宗主国の交代によって、プエルト・リコの社会構造は抜本的な変容を被っている。スペイン支配時代からすでに多様だった文化を、米国は上から押しつぶして粉々にした。米国への移住が可能になり、共同体の分裂が進行し、プエルト・リコは政治から文化にいたるまで、自己アイデンティティに関する議論に多くの困難と向き合うことになった。言い換えれば、プエルト・リコ共同体にとって何を「正史」とするのかは、常に問題をはらむことになったのである⁵⁾。

この二篇はともに、「プエルト・リコ国民文学」、「プエルト・リコ文学史」という「正史」に取り組んだ作品であり、テキストの構造そのものが、主権共同体ではない地域と、そこに暮らす人びとにとっての「正史」とはどういうものかを考えさせるものになっている。このテキストにおける手法は、プエルト・リコの経験を通じたとき、このようにしか書かれないのではな

いかとさえ思えるのである。ここでは、その手法を見ながら、プエルト・リコにとっての「正史」を考えていく。

1. 二つの島——プエルト・リコとハワイ

まずは、物語の主人公を「呪われた愛」ではウバルディノ、「濡れ手で粟」ではモンセラテと見立て、二人の生涯を整理しておこう。

「呪われた愛」のウバルディノ・デ・ラ・バジェは母ドニャ・エルビラと父ドン・フリオのもと、プエルト・リコの一地方グアマニの由緒ある製糖農園「フスティシア」に生まれる。生後まもなく母が死に、乳母エンカルナシオンのもとで育てられる。父は再婚して息子を捨てたため、農園の相続人リストから外される。しかし母の姉妹と乳母のもとで大切に育てられ、大学に進み、卒業後は政治家を志す。

その後、異母兄弟が「フスティシア」農園を違法で米国に売却しようとしているのを察知すると機敏に動き、自らの資金で買い戻すことに成功し、グアマニの英雄として人びとの尊敬を得る。以降、議員として慌ただしい生活を送る一方、「フスティシア」農園の管理は妻（ラウラ）が担うことになる。

当初は幸せな結婚生活を送っていた夫婦は子どもを何人かもうけるが、議員生活で首都と地元を行き来しているうちに、ウバルディノは梅毒に罹患する。それを知った妻は、夫との交渉を拒否するようになり、息子（ニコラス）の嫁（グロリア）がもっぱら介護を担当する。しかし病は進行し、精神にも不調を来した彼は部屋に閉じ込められ、グロリアとだけ交流を維持し、彼女に財産を相続する内容の遺言を残して死ぬ。

以上が「ウバルディノ物語」であり、舞台をプエルト・リコとして展開する。

これに対し、「濡れ手で粟」のモンセラテ・アルバレスは19世紀末、プエルト・リコのマナティという貧しい村の一地区に生まれる。米西戦争でプエルト・リコが米国の支配下に入ると、ハワイ行きの移民船第二便に両親と乗り込むことになる。父親は船に乗るはずのロサンゼルスで、ハワイでのプエルト・リコ人差別を聞きつけて脱走し、生き別れになる。ハワイに着いた母子は農園で何年かの契約期間を務めたのち、労働契約を更新せずに、小さなレストランを立ち上げる。母の恋人であるイタリア人男とモンセラテは食材を調達して、母が調理を担当する。

その後、そのイタリア人がサメに食い殺される。母フロール・マリアはイタリア人とのあいだに子供を身ごもっていたが、出産と同時に母子ともども死ぬ。家族を失って独りになったモンセラテは、ホノルルに出てバーテンダーになる。しばらくして肌に皸や染みが出たので医者にかかる。ハンセン病だと診断されてモロカイ島の療養所に送られる。モンセラテは療養所でプエルト・リコ人と結婚する。しかしその女性（プーラ・ベレス）はやがて亡くなり、次いで療養所の看護師だったポルトガル人（メルセデス）と結婚するが、この女性もたちまち亡くなる。80歳を超えたころ、彼はハンセン病が誤診だったと知らされるが、老齢と孤独のため、療養所を出ずに死ぬと決める。

以上の「モンセラテ物語」はハワイを舞台としている。

2. 米国が支配する二つの島

二つの物語には，プエルト・リコとハワイという舞台の違いがあり，また主人公の階級も，農園主と農民と対照的だが，大きな共通項がある。言うまでもなく，米西戦争後のスペイン支配から米国支配という宗主国の交代にともなうプエルト・リコ社会の変容である。

米西戦争が起きた1898年は太平洋のハワイにとっても特別な年で，この年，米国は7月から8月にかけてキューバ，プエルト・リコを獲得すると同時進行で，ハワイを併合している（ハワイ併合は7月7日。米西戦争の休戦協定は8月12日）。その後キューバは独立したが，プエルト・リコとハワイは米国支配下に置かれるというほぼ同等の地位に甘んじることになる。米国はそのハワイに，プエルト・リコ人を砂糖農園で働かせるために移住させた。こうして1898年を境にして，プエルト・リコ社会は米国本土にも，ハワイにも散っていったのである⁶⁾。

二つの物語には，特別な経験として記されている同じ出来事があり，それはジョーンズ法の制定である。

ウバルディノの物語では彼の父の経験として語られる。プエルト・リコに米国の銀行が開業し，地元の製糖農園は米国資本に買収されはじめる。父フリオは買収を拒み，友人ロドバルドが経営するスペイン資本の銀行との付き合いを続け，持ちこたえようとするが，旧宗主国スペインは新宗主国米国の前に，もはや影響力を行使できない。

「すまないな，チャノ」子どものころの愛称でドン・ロドバルドは「フリオに」答えました。「わかっているだろう，古いぼれたムーア人はよきキリスト教徒にはなれない。私も家族も違う人種にされたくはないんだよ」ドン・ロドバルドは，ジョーンズ法が発効するほんの数ヶ月まえに，島の新しい知事が住民をアメリカナイズするために始めた熱狂的なキャンペーンにふれて言いました。(p.42, 傍点引用者)

ドン・ロドバルドはビルバオ銀行の元総裁，つまりスペイン人で，フリオが頼りにしていた人物である。その彼も，急速に米国化が進むプエルト・リコを引き払おうとしている。こうしてフリオは結局，米国資本の製糖所「エヘンプロ」誕生を眺めさせられる。

今ではすべてが変わってしまいました。わたくしたちの町は天国というにはほど遠い，エヘンプロ製糖所が吐き出す砂糖が，凄まじい竜巻となって夜も昼もアメリカめざしてあふれ出る，巨大なじょうごと化してしまったのです。(p.19)

天国から地獄への変化，これが米国支配下で旧家がたどる命運である。ハワイにいるモンセラテも，ジョーンズ法のことは忘れられない。

チンピラだ乞食だと呼ばれたあと，おいらは相談もなく米国市民にされた。そのことは忘れられねえな。お袋のフローラ・マリアは砂糖協会との契約更新は望まなかった。イタリア人といい仲だったから，お袋はワヒアワ・ビーチ（中略）に小さなレストランを構え

ることにした。それは 1917 年ごろのことだ。(中略) おいらは覚えているが、米国市民にされて、兵隊に呼ばれるまで、おれたちの生活は上々だった。最初、おれたちは断った。一兵卒という高い地位はもらったが、投票権はない。おれたちは法廷に持ち込み、どうやら「勝った」らしいのだが、プエルト・リコ人が投票できるようになったとたん、おいらは徴兵されて武器工場に送られたというわけさ (p.61, 傍点引用者)。

1917年とは、ジョーンズ法によって、プエルト・リコ人に米国市民権が与えられた年である⁷⁾。生まれて間もなくハワイに連れて来られたモンセラテは、とってハワイ人として育てられたわけではない。行きの船でスペイン語を習い、ハワイでもスペイン語を使って生活している。「最初は混血、次はプエルト・リコ人、そしてアメリカ市民 (後略)」(p.49) と、自分の意志とは無関係に次々にアイデンティティが変わっていき、とうとう戦争のための労働力確保を目的にアメリカ市民させられたのである。ジョーンズ法はカリブ海と太平洋のどちらにいるプエルト・リコ人にも及ぶ米国の網だった。

3. 帰属の否定と隔離

もちろんウバルディノは米国のいいようにされることを望まず、製糖農園を奪われないように孤軍奮闘する。彼はプエルト・リコの独立を主張する統一党の政治家で、「自分たちの星、自分たちの明けの明星が、祖国の旗がはためく不朽の天空に向かって輝くのを見るという夢」(p.65)を見ていた。農園を守り通すこととプエルト・リコ独立が彼にとっての最大の関心事だった。

異母兄弟たちは「フスティシア」製糖農園を米国の「エヘンプロ」製糖工場に売却しようとするが、ウバルディノは違法取引であると問題化し、自分が買い戻す。そのときウバルディノが根拠としたのが、「リコール権」(p.75)という「旧いスペインの法律にうたわれている権利」(p.75)である。

ウバルディノにとって、さかのぼるべきはスペイン時代である。大土地を所有するデ・ラ・バジェー族にしてみれば、スペイン支配の時代は決して辛い過去ではなく、利権を得ていた古き良き時代だ。自らの血がスペインに帰属していることは、ウバルディノにとって揺るがせにはできない決定的な事実だった。

しかしその後ウバルディノは、驚くべきことに、自らの血の純潔が虚偽であったことを知る。由緒ある苗字デ・ラ・バジェはスペインの血を引く白人(クリオーリョ)としてプエルト・リコの貴族階級に属していた。その娘のエルビラ(ウバルディノの母)の結婚相手が選んだフリオ(ウバルディノの父)は「生クリームのような白い肌」(p.83)をして、「征服者の風格」(p.83)のある白人だと伝えられていたが、実は黒人の血を引く成り上がりのムラート(混血)だったことをウバルディノは知るのである。その噂はすでにグアマニの人びとの知るところで、それゆえに娘たちは白人社交界で相手にされず、米国資本の「エヘンプロ」製糖工場の息子たちに近づいていかざるを得なかった。

混血であるがゆえに、新しいアイデンティティを打ち出して行くことも可能だったかもしれないが、ウバルディノはそうしない。政治的独立も挫折し、白人の血が偽りであるという帰属

の否定を敗北と受け止め、梅毒で死んでいく。こうして、ウバルディノは米国化による恩恵をいっさい受けず、帰属の否定と隔離による最後を迎えるのだ。

モンセラテはどうか。彼は砂糖黍刈りという奴隷的な生活から始めたが、その後、レストラン経営を始めて自活する。彼にとってプエルト・リコとハワイが似たような自然環境をもつ土地だったことは精神的安定をもたらした。プエルト・リコではハリケーンの頻度が時間の尺度になってはいたが、ハワイでは火山の噴火がその代わりになる。マウイの海辺を歩いたり、ハレアカラ・クレーターに登ったり、ヒロで雨に濡れたり、月の輝きのもとタバコを噛んだりすることは、彼にとって幸せな瞬間だった。しかしその彼にも、ウバルディノと同様に帰属の問題がつかまとう。

おいらは何度もプエルト・リコ人だと思っているのかと聞かれ、いつもそうだと答えてきた。忘れてくても、プエルト・リコ人であることを忘れさせてくれたとは思わない。いまでも、ハワイに来てからも、おいらはハワイ人になろうとしてきた。ハワイ人もプエルト・リコ人も、貧しいところと、(中略)いつ自然に何をされるかが分かっている者によくある物静かなところがそっくりだ。(中略)何度もおれの血にハワイ人の血が流れていたらと思ったものだ。そうすればこんなに根無し草だと思うこともなかったからだ。(p.57)

幼いときに自分の意志とは別にハワイに連れて来られたモンセラテにとって、プエルト・リコ人であったとは言い切れまい。ハワイで彼がバーテンダーとして働く気になったバーの名前は「おれはここに残る」だった。その名称が示しているように、彼はハワイに同化しようとしていた。にもかかわらず、どれほど自然環境が似て、安らぎを感じていようとも、ハワイ人ではなく、根無し草である。「米国人」は強制されたものでしかない。この帰属の否定は生涯彼について回り、その後ハンセン病と診断され、隔離された後半生を送る。

帰属の否定経験をもつ二人の男がともに、皮膚接触を忌避され、隔離された経験をもって生涯を終えるという点は示唆的である。モンセラテは、プエルト・リコを「植民地(コロニア)」と呼び、「ハンセン病の療養所」も「コロニア」(p.68)と呼んでいる。二人の隔離は、米国によるプエルト・リコに対する施策が、隔離政策であることを暗示するものである⁸⁾。

4. 覆される正史

4.1 「呪われた愛」の場合

ではいよいよ、それぞれの物語が小説のなかでどのように位置づけられているのかを見ていこう。

「呪われた愛」のなかで「ウバルディノ物語」を書いているのは、エルメネヒルド・マルティネスという男である。彼はウバルディノの大学時代の友人で、卒業後は父親が創業した新聞社(ラ・ナシオン)の記者を長年務め、政治家ウバルディノを間近で見ている。引退後、グアマニで公証人・弁護士事務所を開設し、その仕事の傍ら、友人にしてグアマニの名士ウバルディノを主人公とする物語を書いている。

「呪われた愛」は全体が10の断片に分かれ、「ウバルディノ物語」はそのなかで4篇を占めている。「グアマニ」と題された、小説の冒頭に置かれた断片は以下のように始まる。

その昔、わたくしたちグアマニ人は自分たちの国とこの谷間の土地を、とても誇りにしていました。毎日午後三時に周囲の切り立った赤茶色の岩山が泣きくずれて、お決まりの驟雨が襲ってくるころ、一日の労働はもう終わっていて、町のすみずみまで清められた通りの上空を、鳩の胸のような雲が流れていくのを、わたくしたちは崖の上からよく眺めたものです。グアマニの住民は自分たちの国を愛し、もちろん、そこがこの世で一番美しい国だと思っていました。(p.17)

名士ウバルディノを描くにあたり、エルメネヒルドは、グアマニという土地から書き起こそうとする。作者ロサリオ・フェレが序文で述べているところによれば、この語りは郷土小説(Novela de la tierra)を意図して模倣したものだという。ここで言う郷土小説とは、19世紀的なリアリズム小説のラテンアメリカ版と見ていいだろう。大土地所有を背景に、奴隷制度を維持しつつも、そこに牧歌的で自律した世界があったことを叙事詩的に綴ったものだ。

執筆者エルメネヒルドは、「一国の民が国民としてまとまろうとするならば、指導者が、傑出したカウディジョが必要であり、もしなければ創りださなければならない。幸運にも我々にはその必要がなかった。グアマニにはウバルディノ・デ・ラ・バジェがいたからだ」(p.40)。こうしてエルメネヒルドは、「その名も高き彼の生涯の物語」(p.40)が語られる必要があるとして、いざ小説を書き始める。このような立場から書かれる物語を、プエルト・リコ国民文学＝「正史」と見ていいだろう。

ところが、ウバルディノを主人公とする叙事詩的小説は、「グアマニ」に続き、ウバルディノの生誕(「ドニャ・エルピラの結婚」)、ジョーンズ法制定による米国の侵略(「落胆」)、ウバルディノの製糖農園奪回(「奪回」)までが書かれるものの、そこで中絶してしまう。というのは、「呪われた愛」のなかで、「ウバルディノ物語」は「物語内物語」に過ぎず、その完成は、「物語」の外部の力によって頓挫してしまうからである。

では外部にある力が何かというと、女性たち(デ・ラ・バジェ家に嫁いだラウラやグロリア、女中)の声で、それらの声が、「ウバルディノ物語」を中断させるのである。

著者ロサリオ・フェレは以下のように、「呪われた愛」の仕掛けについて言っている。

ドン・エルメネヒルドが語るのは失われた天国、不正や飢餓は存在しないことになっていた封建的な農業社会である「豊かな」港の公式バージョンの物語である。一方、ドン・エルメネヒルドの小説中の女性三人、ティティナ、ドニャ・ラウラ、グロリアはすべてが変化し、確固とした現実などは存在しないグアマニ港の歴史を語る。お墨つきの小説家の話に疑問を呈し、英雄的な首領神話に立ち向かうのは彼女たちだ。(p.13, 傍点引用者)

このように、女性たちの声(外部の物語)は、エルメネヒルドの「正史」を転覆させようとする。グロリアの発言、「ドン・エルメネヒルドにしても、書く予定にしていた、いや、すでに

手をつけていたにちがいないあの小説を書くことは、もうできないでしょうからね。」(p.91)によって、ウバルディノの目論見は途絶したことが示される。こうして「プエルト・リコ国民文学」が形だけのものであること、それがエルメネヒルドによる一方的な妄想でしかないことを暴露される。そのことが、「物語内物語」と「物語外物語」の両方を読む読者に示される⁹⁾。

ここでは、一人の白人男(=エルメネヒルドの語り)に対して、階級、肌の色の異なる複数の女性の声が対置させられている。公式の叙述に対し、女性たちの声は、表立っては言われないう陰口、噂、デマといった「非公式」の内容で、それらが一体となって、「正史」の完成を途絶させる。ここでの頓挫は、白人男性執筆による「正史」の正統性に疑義が呈されていることを意味する。

4.2 「濡れ手で粟」の場合

「濡れ手で粟」では、もう少し複雑である。まず、この短篇における「物語内物語」から考えてみよう。

この短篇そのものの語り手の「わたし」は、ニューヨークに住むプエルト・リコ人である。大学や文化機関でプエルト・リコ史などを講じている作家だ。限りなく著者マヌエル・ラモスに近い存在と見ていい¹⁰⁾。

その「わたし」は、近々開催されるプエルト・リコ文学に関する最初の学会に登壇する予定になっている。学会を前に、開催地であるニュージャージーには、プエルト・リコ文学関係者が大挙している。こうして「わたし」はマグリというプエルト・リコに在住の旧知の女性作家と久しぶりに再会し、夕食に出かける。二人がプエルト・リコ文学について語り合っていると、隣のテーブルにいたハワイ在住のプエルト・リコ人女性研究者(ノルマ)から話しかけられ、話を進めていくうちに、その彼女が、モンセラテ・アルバレスの書いた手紙を見せてくれる。手紙の書き出しは以下のようなものである。

おいらはモンセラテ・アルバレスで、1895年ごろ、いまでは町になったらしいが、マナティのラ・フロリダという地区に生まれたのさ。(p.49)

テキストの構造は、モンセラテの書簡からの引用と、語り手「わたし」の告白が交錯するように進む。断片からなるという点では、「呪われた愛」と同じ構造を持っている。テキストは全体が9つの断片で構成され、そのうち5つが、「モンセラテ物語」で、順に、自分の生誕、ハワイへの移動、道中の苦難、ジョーンズ法制定、ハンセン病と診断されてからの療養所生活となっている。しかし、「モンセラテ物語」は「物語内物語」ではない。

「濡れ手で粟」の語り手の「わたし」の状況を振り返って考えてみると、彼は学会発表のために「プエルト・リコ文学史」を準備している。短篇のなかでその原稿の内容が明かされることはないが、そこには、プエルト・リコ文学に関する彼なりの見方が反映されていたはずである。実際、彼は学会の初日にプエルト・リコ文学をめぐるさまざまな講演を聞き、その内容、つまり先行研究を踏まえながら、考えをまとめているところである。彼の頭のなかには、アカデミズムの現場で発表されるはずの「プエルト・リコ文学史」が生成中なのである。

準備中のこの「プエルト・リコ文学史」こそ、この短篇のなかの「物語内物語」と見なすことができる。そしてこちらの作品では、先に述べた「モンセラテ物語」が割り込み、その「文学史」が完成させられない構造になっている。まるで「ウバルディノ物語」が女性たちの声によって完成させられなかったのと同じである。

彼の講演は、アカデミズム関係者に裏打ちされる「文学史」であるから、プエルト・リコ国民文学に関する公式バージョン＝「正史」であろう。ところが、モンセラテの手紙を読み、知らなかったハワイへのプエルト・リコ移民の存在への驚きと恥ずかしさに襲われる。そして、米国本土とプエルト・リコ諸島のみを念頭に置いていたプエルト・リコ文学史が立ち行かないことを知る。

したがって、「濡れ手で粟」では、「わたし」が用意した「正史」に疑義を呈する役割を果たすのが、「モンセラテ物語」である。「呪われた愛」と比較すれば、こちらでは権威ある作家の学術的な論考に対して、農民の素朴な語りが置かれているという対比構造を認めることができるだろう。

5. 問われる「正史」

整理しておこう。「呪われた愛」の「ウバルディノ物語」は「物語内物語」で、その「プエルト・リコ国民文学」は、「物語外物語」である女性たちの声によって頓挫させられる。一方、「濡れ手で粟」では「わたし」が構想する「プエルト・リコ文学史」が「物語内物語」で、「物語外物語」である「モンセラテ物語」によって頓挫させられる仕掛けとなっている。

「呪われた愛」の場合、先に述べたように、その目的は、「正史」としての「ウバルディノ物語」を覆すところにある。ここでは、男対女、単数の声対複数の声、といったように、明確に対称性をもった声配置されることで、「正史」の正統性が覆される。ウバルディノやデ・ラ・バジェ家の没落、一族の忌まわしい殺人事件を読者に語ったのは、ラウラやグロリア、女中のティティナであって、エルメネヒルドはそういったものに目をつぶろうとしていた。「正史」は「偽史」に反転していくのである。

小説を中断させられたエルメネヒルドのその後は不明である。エルメネヒルドはいかさま小説家と呼ばれ、小説に描かれる世界を崩壊させようというのか、農園に火を放とうとするグロリアの語りで終わる。

「濡れ手で粟」でも同じように、「モンセラテ物語」によって「プエルト・リコ文学史」は中断させられる。しかし「呪われた愛」とは異なる展開を見せていく。ここでは、その中断と並行するようにして、ハワイ史——クック船長のハワイ到着から1898年のハワイ併合まで——の叙述が開始される。

このハワイ史の挿入は、プエルト・リコが置かれている状況が、さらに別の世界でも起きている状況であることを示す機能を果たすことになっている。この短篇の読者として想定される、ラテンアメリカ、とくにカリブ地域の読者にとって、太平洋のハワイが1898年に米国に併合されるまでの歴史は、ときにラテンアメリカの歴史と重なり、ことさら興味深いものとして受け止められるに違いない。

またこの短篇内では、随所にプエルト・リコ人の流浪が語られる。ハワイで日本人と結婚し、日本語とハワイ語と英語を話すプエルト・リコ人。フィリピン人と結婚したプエルト・リコ人。ブロンクスに生まれ、ハワイに育ち、イタリア・アイルランド系米国人と結婚したプエルト・リコ人。

こういう風にして、プエルト・リコという種が土地を持たずとも、広い世界に散らばっていることが伝えられる。特定の領土を持ち、そこに主権共同体を構築するのとは違う、世界に散って行ったプエルト・リコ性に目配りするように読者を誘い込もうとしているかのようだ。散らばっていったそれぞれの種が語る物語が、それぞれプエルト・リコの「正史」としての価値を持っているとも言える¹¹⁾。

このとき「正史」というのは、ハワイであれ、米国であれ、プエルト・リコであれ、その他の土地であれ、複数の「正史」として偏在する可能性をもつ。絶対的な一つの「物語」ではないプエルト・リコの無限の「正史」への回路がここに開かれる。

作家というものの権威、立場がより批判的に捉えられるのもこの短篇の特徴である。学会で出席者から、「言葉は汗をかかない」という批判を受ける場面が挿入されるように、作家や研究者というものの存在の罪深さや、他人のふんどしで生計を立てることに対する良心の呵責が吐露される。そもそも、「濡れ手で粟」と訳したタイトルは、原題は「Vivir del cuento」で、直訳すれば、「お話を作って生計を立てる」、つまり「楽しんで金儲けする」ということである。そんな風にして生きることの恥を、自戒を込めて語ったのがこの短篇である。学会発表はできなかったと思われるこの物語の語り手の「わたし」は、では最後、どうするのか。

彼は「濡れ手で粟」というタイトルの短篇を書こうと机に向かう。「呪われた愛」では描かれなかった「物語内物語」の作者のその後が示され、おそらくそこで書かれた短篇が、我々が読んでいる「濡れ手で粟」だろう。こうして、「プエルト・リコ文学史」に挫折した「わたし」と実在のマヌエル・ラモス・オテロが重なり合うのだ。

5. おわりに

プエルト・リコはキューバやフィリピンと同じように、19世紀後半に独立運動やスペイン帝国からの自治を獲得する運動が芽生えながらも、1898年を境に米国の支配下に入る。同じ年、ハワイは王国を成していたにもかかわらず、米国に併合される(連邦州になったのは、キューバ革命と同じ1959年)。キューバやフィリピンは紆余曲折の末米国から独立し、キューバはスペイン語、フィリピンはフィリピン語を公用語の一つとするなど、英語の干渉を最小限にとどめている。一方、ハワイは英語に圧倒的に支配され、ハワイ語は消滅の危機に瀕している。

これら1898年をきっかけに大きな変化を被った諸国・地域のなかで、プエルト・リコは21世紀に入ったいまでも、米国支配が続いている。近隣のカリブ海を見渡してみると、プエルト・リコは、依然「植民地状態」が継続するフランスの海外県と類似しているように見える¹²⁾。しかし、マルチニークやグアドループは、植民地時代を通じて現在に至るまで、一貫してフランス支配下にあり、宗主国の交代を経験したプエルト・リコとは事情が異なっていることに留意が必要である。

本論では、プエルト・リコを題材にした「正史」の試みを、二つの作品から検討した。どちらもスペイン語で書かれた作品で、プエルト・リコではスペイン語による表現活動は衰えていない。この背景には、20世紀に「ラテンアメリカ文学」が台頭したこともかかわっているだろう。

「呪われた愛」では「正史」が覆されて「偽史」に反転していく過程が、「濡れ手で粟」ではプエルト・リコの「正史」が世界に偏在する可能性が確認された。「正史」が問い直される両テキストの構造それ自体が、20世紀のプエルト・リコの変容そのものと言える。

求めても常に手をすり抜けていくようなプエルト・リコの「正史」をめぐっては、この先も文学分野に限らず、主題化され続けることが予想される¹³⁾。しかし、その作業によって、「正史」の虚構性が白日の下に晒され、それが近代国家の「正史」を批判する機能を持ちうることもまた確かだろう。

注

- 1) 本稿は、拙稿『『低開発の記憶』にみる植民地知識人の戦略——カリブ文学論その1』（東京外国語大学総合文化研究所、『総合文化研究 (Trans-Cultural Studies)』第18号, 2015年, 54-65頁 <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/81439>)に続く、「カリブ文学論その2」として書かれたものである。
- 2) Ferré Rosario, "Maldito amor" in *Maldito amor y otros cuentos*, Vintage Books, New York, 1998[1986], pp.7-85. なお、原書は著者の手で英訳されている。*Sweet Diamond Dust*, Plume Book, New York, 1996. この英訳は固有名詞の変更があるほか、大幅に加筆されている。邦訳は『呪われた愛』（松本楚子訳）、現代企画室、2004年。本稿における「呪われた愛」からの引用は、原則として邦訳に依拠し、該当頁を記す。文脈上一部修正している場合もある。
- 3) Otero, Manuel Ramos, "Vivir del cuento", in *Página en blanco y staccato*, Editorial Playor, Madrid, 1987, pp.49-69. 本稿におけるこの短篇からの引用には、原典の該当頁を記し、訳文は引用者が付した。
- 4) 巽孝之『メタフィクションの思想』ちくま文芸文庫、2001年を参照。
- 5) 政治では、州昇格か独立か現状維持かのいわゆる「ステイタス」問題がある。この問題については、阿部小涼「ポストコロナル・プエルトリコ——一九九八年住民投票をめぐる考察」（遠藤泰生・木村秀雄編『クレオールのかたち』東京大学出版会、2002年、65-89頁）などを参照。文化面のプエルト・リコ性に関する議論では、ファン・フローレス（片桐美智子訳）「コルティーホの逆襲～プエルトリコ文化の新しいマッピング」（東琢磨・長嶺修編『Djobeurs ジョブール カリブ 響きあう多様性』ディスクユニオン、1996年、21-39頁）などを参照。
- 6) プエルト・リコ人のハワイ移住については以下の資料を参照。López, Iris, "Borinkis and Chop Suey: Puerto Rican Identity in Hawai'i, 1900 to 2000.", *The Puerto Rican Diaspora*, Temple University Press, 2005. (Kindle版のため頁数不明)。
- 7) 阿部小涼「国民を証明しようとする人々」（樋口映美／中條献編『歴史のなかの『アメリカ』——国民化をめぐる語りと創造』彩流社、2006年、275-296頁）。
- 8) 2014年6月、プエルト・リコに対する米国の政策をアパルトヘイトだとする論考「プエルト・リコ——領土の『アパルトヘイト』」がプエルト・リコの新聞「El Nuevo Día」紙に掲載された。南アフリカ共和国にアパルトヘイトが成立していくのと同時期に、米国はプエルト・リコを自治領としていることなどが指摘されている。<http://derechoalderecho.org/2014/06/29/sobre-la-columna-del-juez-estrella-y-los-jueces-en-la-esfera-publica/>
また、2015年6月、プエルト・リコが財政破綻の危機にあることが分かったが、債務不履行になっても、プエルト・リコは自治領のため、デトロイトに認められた破産法の適用は認められないとされた。ここにも、プエルト・リコに対するある種の「隔離政策」の一端を認めることができよう。

- 9) Bustos Fernández, María José, “Subversión de la autoridad narrativa en “Maldito amor de Rosario Ferré”, *Chasqui*, Vol.23, No.2 (Nov., 1994), pp.22-29.あるいは, Divine, Susan, “La meta-historia de Puerto Rico en Maldito amor de Rosario Ferré”, *Divergencias. Revista de estudios lingüísticos y literarios*, Volumen 2 Número 2, Otoño, 2004, pp.73-80などを参照。
- 10) マヌエル・ラモス・オテロは1948年, この短篇の「モンセラテ」と同様, プエルト・リコのマナティに生まれた。7歳でサン・ファンに出て, その後, プエルト・リコ大学の付属高校に通う。67年, 短篇で文学賞を受賞。プエルト・リコ大学で学んだ後, 68年より90年までニューヨーク在住。創作を発表する傍ら, 79年にはニューヨーク大学で文学修士号を取得。ニュージャージーのラトガーズ大学など, いくつかの大学でラテンアメリカ文学やプエルト・リコ史について講じる。1990年, サン・ファンに戻り, 同じ年, エイズが原因で死亡。邦訳作品に, 「奴隷とご主人様の模範的生活」(山形浩生訳)『禁断のアンソロジー ハイ・リスク』白揚社, 1993年, 217-221頁がある。キューバのレイナルド・アレナスとほぼ同じ時期にニューヨークにいたが, 面識はなかったようである。
- 11) Lloren, Irma, “Los espejos del exilio: fragmentación y reconfiguración de los signos nacionales en los cuentos de Manuel Ramos Otero”, *Arrabal*, 2000, Núm 2-3, pp.215-223.を参照。
- 12) プエルト・リコとマルチニクを比較した論文として, たとえば以下のようなものがある。Martínez-San Miguel, Yolanda, “Nuyoricans and negropolitanos: Diáspora y racialización en Puerto Rico y Martinica”, *Revista Iberoamericana*, Vol. LXXV, Núm. 229, Octubre-Diciembre 2009, pp.1223-1242. また, 紀行文ながらも, Rodríguez Juliá, Edgardo, “Primer encuentro con Martinica”, *Caribeños*, Instituto de Cultura Puertorriqueña, San Juan, 2002, pp.269-273でも, プエルト・リコとマルチニクの類似性が指摘されている。
- 13) 近年, 米国支配下であることに異議を申し立て, プエルト・リコを再びスペイン支配下に戻そうとする運動が持ち上がっている。この動きは, プエルト・リコの「正史」をめぐる新しい動きだと考えられる。詳しくは以下のサイトなどを参照のこと。 <https://www.facebook.com/reunificacionpuertorico>

